

Brave New WOMEN



国際連合創設 70周年に寄せて—— 世界平和に懸ける女性たち

今年は国際連合創設 70 周年のアニバーサリーイヤー。そして 2016 年、日本は加盟 60 周年を迎えます。

この大きな節目に、国連の主要なポジションで働く日本女性 5 人をフィーチャー。

国際情勢の最前線で、日々、人々の平和や安全といったミッションに取り組む女性たちの言葉を通して、
世界最大にして最高峰の国際機関と日本の関わりについても、あらためて注目してみましょう。

日本出身で唯一、「国連ピース・メッセンジャー」を務めるヴァイオリニスト、
五嶋みどりさんのスペシャルインタビューもお届けします。

Interview & Text : MAYUMI YAWATAYA

8つのキーワードで知る国連と日本

国連創設70年のクロニクル

2

17+169

2030 年に向けて
新たな挑戦がスタート

»



4

平和の鐘

国連で響き続ける
日本発平和のメッセージ

»



7

PKO

「平和構築」と「安全」と

»



1

1945

「平和で安全な世界」を
目指した 70 年、その歩み

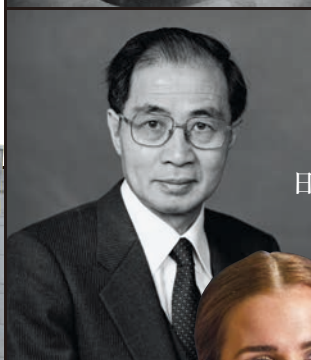
«

3

11回目

日本の貢献と責任の 60 年

«



5

HeForShe

世界中の女性たちのために

«



6

人間の安全保障

国の枠から個々人の安全へ

«



8

COP21パリ会議

196 の締約国が
肩を並べる国際会議

«



1 第二次世界大戦の惨禍を経た1945年10月24日、「世界の平和をつくる国際的な機関」という構想のもと、国連が誕生しました。現在加盟国数は193。総会、安全保障理事会、国際司法裁判所など6つの主要機関と職員約4万4000人を擁する、世界最大の国際機関に成長。2 去る9月、「持続可能な開発目標(SDGs)」が、ニューヨークの国連本部で開催された「持続可能な開発サミット」で採択。「貧困をなくす」といった17のSDGsと169項目のターゲットなどからなる国際社会の新たな挑戦が、2030年を達成の目標として、今、始まっています。3 日本は1956年に80番目の国連加盟国に。事務次長に明石康さん、国連難民高等弁務官に緒方貞子さんなど、人的貢献を行っているほか、安保理の非常任理事国に多数回選出。2016年より11回目の任期が始まります。4 毎年春分の日と9月21日の国連ピース・デーには、事務総長が国連本部の庭にある「平和の鐘」を鳴らすのが恒例です。実はこの鐘、平和運動に尽力した日本の中川千代治さんが1954年に寄贈。当時のローマ法王ほか、平和を希求する世界の人々から提

供されたコインが使われています。5 持続可能な開発、平和構築、人権、環境などに並び、女性のエンパワーメントも国連の主要な活動エリアです。例えば UN Womenでは、ジェンダー平等の支持を男性に呼びかける「HeForShe」キャンペーンを実施中。親善大使はエマ・ワトソン。6 あらゆる脅威が国を越えて複合化する現代では、国家だけでなく、個々の人間の生存、生活、尊厳を守る安全保障が必須だというのが、国際社会のコンセンサスです。国連はその牽引役。概念の定着には緒方貞子さんのリーダーシップも。7 国連平和維持活動(PKO)は、国際社会が派遣する文民と軍人が紛争のあった地域に入り、平和的な解決や停戦監視、民主化、復興開発などを支援するもの。現在、世界各地で16のミッションが展開しています。8 利害の異なる各国が、地球規模の課題のもと合意形成に取り組む国際会議も、国連の大きな仕事です。例えば11月30日～12月11日にパリで開かれる「気候変動に関する国連枠組み条約」の第21回締約国会議(COP21)は、私たちの未来を左右する地球温暖化対策がテーマ。



「私たちは、説得力のみが武器なんですね。紛争を未然に防ぐ、予防外交の仕事もそうです。国連は軍事行動に反対し、話し合いによる平和的手段での解決を探すのが信念ですが、世界の現状は…なかなか難しいですね」



国連平和構築支援
事務所次長

山下真理さん

やました・まり●上智大学法学部、米フレッチャー法律外交大学院修了後、1990年より国連事務局で政務などを担当。国連広報センター所長、政治局アジア太平洋州部部長を経て現職。

〈写真左上〉インドネシアのジョグジャカルタでパティックを用いたプロジェクトを視察。これまで山下さんが支援した政治面の整備は、人々の尊厳ある生活と平和を守る土台に。

国連の活動には「平和と安全」「人権」

「開発」という3つの大きな分野がありますが、山下真理さんは政治的アプローチによるピースメーキング（平和構築）のエキスパートです。現在の所属は、ニューヨークの国連本部事務局にある、平和構築支援事務所（PBSO）。

「PBSOの支援は、紛争後や移行期にある国が対象で、当事国の要請を受け行われます。停戦合意ののち、通常は平和と安全の維持のためにPKOが派遣され、その後開発援助チームだけが残りますが、国際社会の注目も投資額も大きなPKOが撤退した後のギャップが、大きいんですね。国情が不安定になり、紛争や難民が生じるサイクルに戻る場合もある。そのギャップを埋めるのがPBSOです」

日本の外交官だった父とフィンランド人の母をもつ山下さんにとって、国際的な仕事に就くのは自然な流れでした。とはいえ、時に憎悪を抱え合う現地の人々の間を調停する仕事は、情勢分析などの専門性に加え、人間力をも問われるもの。

“予防外交”から平和のための国づくりまで

国連に入ったのは、1990年の冷戦

終結直後。世界地図が変わり、やがて国内紛争が増え、国連の課題は多様化していきました。例えば、前の職場の政治局で関わったネパールでは、和平プロセスの定着、選挙支援、憲法作成や少年兵の社会復帰のサポートなど、平和な国づくりの支援は多岐にわたりました。

「ネパールの支援は、指導層との関係づくりから始まり、全体で約10年に及びました。政治の仕事はすぐには結果が出ないですね。『国連は何をやっている。結果はどこだ』とよく批判されます（苦笑）。それでも現地で『国連が最後の希望よ』と手を強く握られたりすると、国連の役割や責任を再認識し、この仕事を選んで良かったと痛感するんです」

ポジティブで明快。その笑顔に好感を覚える山下さんですが、日本人であることが、現地での信頼につながることも。

「国連は西洋社会と同一視されがちですが、実際は多彩な文化の職員がいて、それが強みなんです。白黒をはっきりさせる西洋のやり方とは違う、日本的アプローチや気遣いが、歓迎されることも多いですよ。アジアやアフリカでは、一般の人が『あの素晴らしい橋を造ったのは日本だ』と知っていて、日本に感謝と期待をもってくれてもいます。平和構築や国連外交の分野でも、日本が国際社会に示せるものはたくさんあると思います」

日本女性たちが語る“世界”



「このところ特に政策立案に寄与する統計の大切さが再認識されつつあり、政策のインパクトを客観的に把握するためにも、事象を数値化して検証しなければという気運が高まっています。MDGs（ミレニアム開発目標）やSDGs（持続可能な開発目標）という国連の開発の目標設定にも、統計は大きな役割を果たしています」

大崎敬子さんは、国連本部事務局のなかで統計のプロとして活躍しています。2000年に目標が掲げられ、今年ゴールを迎えたMDGsの達成状況を緻密に分析してきたのも、統計部の仕事でした。

「MDGsは国連の主導のもと、世界の国々が一丸となって貧困撲滅などの開発のプライオリティを設定した、初の試みでした。私自身もMDGsの年次報告書の発刊に編集主幹として携わり、数字やグラフを使って、進捗状況を一般の方にもなじみやすく紹介するよう努めました。新しい開発目標のSDGsは、経済社会環境分野を複合的に網羅するもので、その進捗状況の把握には膨大な数の指標が必要とされます。なかには統計的な概念が国際標準化されていなかったり、データソースが不十分なものもあり、統計を使って達成状況をモニターしてゆくのは、



国連経済社会局
統計部次長

大崎敬子さん

おおさき・けいこ●東京女子大学卒業。米ジョージタウン大学大学院修了後、'88年に国連本部人口部に。国連アジア太平洋地域経済社会委員会を経て現職。

〈写真左上〉国勢調査の指導で訪れたミャンマーの村での1枚。小学校で出会った子どもたち。統計が未整備な開発途上国での技術支援も、大崎さんの主要な仕事です。

グローバルな目標達成を支える“統計”

大きなチャレンジだと思っています」

学生時代に訪れたスリランカで、質素な暮らしのなかで豊かな気持ちをもつ人々と出会い、開発について考えるきっかけになったという大崎さん。国連でも一貫して人口と社会開発分野に関わってきました。そのキャリアは25年以上。

「調査研究、政策立案、技術協力という、違った性格の業務に携われたのはラッキーでした。何といっても、国連は女性にとって働きやすい職場です。一方で、この25年を客観的に見ると、世界のパワーバランスが変わり、国連が介入する問題の質も変化してきました」

冷戦終焉、EU誕生、紛争の多発、BRICs台頭、アメリカ覇権の弱まり…。「世界の動きを皮膚感覚で感じられる職場でした。ルーマニアのチャウシエスク大統領が処刑されたときは、ルーマニア出身の職員の母国への思いを強く感じましたし、ソ連崩壊時はロシア人職員の危惧を知り、逆に日本の平和を再認識しました。難民の経験をもつ人もいます。国連職員は、地球市民の縮図なんですね。均一性の高い日本では地球市民の一員だと自覚がしにくいですが、海外にいらつしやる機会には現地の人々の暮らしに目を向け、多くを共感していただきます」

大崎さんが担う統計の数値も、世界の人々の暮らしを知る手がかりです。



モルディブ国連常駐調整官 兼 国連開発計画 (UNDP) 常駐代表
野田章子さん

のだ・しょうこ●外務省のJPO派遣制度に合格し、民間企業から国連に転職。国連開発計画 (UNDP) 本部、モンゴル事務所、ネパール事務所などで要職に就き、現在モルディブ駐在。

〈写真右〉前職のネパール事務所所長時代には、視察先の村の女性たちとも意見交換をして、文化や価値観の違いでそれぞれの開発課題に対応し、9番目の赴任先モルディブへ。

青い海のラグジュアリーなリゾート。そんなイメージのモルディブで、開発援助に奮闘しているのが野田章子さんです。「国連がそこで何を？」とはよく言われます (笑)。確かにモルディブは経済的には成長していますが、民主主義の制度が始まったのが2008年と若く、政治的には不安定で、まだ開発途上国なんです。観光セクターの利益が国民の生活に平等に反映されておらず、格差も広がっています。働かない若者が麻薬に手を出し…という社会問題も。また、これは日本とも似ていますが、女性議員の割合が6%だけなど、要職に就く女性が少ないというジェンダーの不等しさもあります。気候変動に影響される生活用水の管理など、環境問題の課題も大きいです」

UNDPの代表に加え、モルディブ駐在の全国連機関の調整役も担う野田さん。その日常も、やはり多彩です。

「国連では5年ごとに開発計画を立てますが、2016年から始まる計画を、モルディブ政府、UNDP、ユニセフ、WHOなどを含む11の国連機関と協力し、NGO、ドナー (援助国) などとの協議も踏まえ、調印にまとめたのが直近の大きな成果です。調印式でカメラのフラッシュを浴びたりメディアに出演したりというのは、この仕事の華やかな部分ですね。あとは村への視察、事務所のマネージャーとしての資金管理やスタッフのケ

現場のリアルな声を開発計画に結びつけて

ア、ニューヨークの国連本部の政治局とのリエゾンといった業務もあり、本当にいろいろなことを毎日やっています」

これまでタジキスタンやコンゴなど9カ国に駐在。それぞれに異なる課題に取り組んできましたが、どの地でも大切にしてきたのは、現地の人々と接すること。

「開発機関で働く者として、実際に現場で何が起きているかをちゃんと把握しないと、何を話しても信頼されません。モルディブでも首都のマレだけでなく、なるべく島に行って、島の人の生活を見ています。先日はスピードボートで1時間ほどのウクラス島に行きました。大きな開発課題であるゴミ処理に成功している島でして、他島の人たちを招いての研修をUNDPが主催したんです」

かつてダイビングで訪れたフィリピンのセブ島で、ストリートチルドレンの過酷な状況と社会の不平等を見たのが、開発援助に進むきっかけだったそうです。「シリアの問題もそうですが、今ほどの国も一国だけでは成り立ちません。日本にいても世界のことに関心をもってもらえれば。国連も官僚的な組織でうまくいかない部分もありますが、少しでも格差のない世界になるような支援に貢献していきたいです」



特別インタビュー・国連で活躍する

「自分のエネルギーを使うなら人のためについていう。大阪のおばちゃん」的な感覚でした (笑)。各国の人と仕事ができるのも楽しいじゃないですか。それに欠点はあっても、すべての国が等しく1票をもつというシステムが、現存するなかではいちばんいいと思ったんです」

平原弘子さんがそう考えて国連を目指したのは10代のころ。そして今の活躍の場は、平和を築く最前線のPKO (平和維持活動)。赴任先は南スーダンです。

「PKOという軍隊を想像されがちですが、実際は文民主体の活動です。揉め事の調停から行政、司法といった機構の基礎づくりまで、多岐にわたる活動をするのが文民で、その保護と和平合意が守られてくるかの監視のために平和維持軍がいます。あくまで主導は文民なんです」

「文民のピースメーカー」と呼ばれる民政官でもある平原さんは、政局分析、人権やジェンダー意識の促進、人材紹介、州知事の相談役など、まさにマルチプレイヤー。UNMISSの事務所長として、南スーダン10州の中のひとつ、東エクアトリア州を管轄しています。

「現場は毎日何でもありで、ケンカの仲裁や、日本の戦後復興の写真を見せて『70年でこれやで。あんたらにもできるで！』と励ましたり、お母ちゃん、みたいです (笑)。ただ、南スーダン北部で紛争が再燃したため、比較的安全な東エク

平和の基礎固めに奔走するPKOオフィサー

アトリア州でのPKOの任務も変更され、活動が後退しました。州も協力的で、開発の初期段階に進めるまでになっているのに、内乱中の国と判断されて資金も投入されない。このままでは、この州も負の伝染を受けかねません」

朗らかな関西弁からは、温かく当意即妙なコミュニケーション能力を感じますが、強い危機感と現状を打開したいという切迫した思いも、伝わってきます。

「経済が悪くなれば物価が上がり、雇用が生まれなければ働き先がない。仕事のない若者は戦争に参加する。悪循環です。現地の意識改革も毎日促していますが、やっぱり、希望が必要なんです。だから今、学校教育や職業訓練などソフト面に資金を引き寄せたいんです。日本の一般の方からの寄付もありたいですね。PKOでできなくても、それができる人たちが現地の適任者を結びつけることはできますから。戦争って高くつくんですよ。紛争下の人道援助などには巨額が必要ですが、平和であれば、ずっと少ない額で、未来にリターンのあるプロジェクトにお金が投入できます。日本など、援助する側の負担も減るわけなんです」

彼らが自分の家族だったら…。平原さんのパワフルな行動力の源には、そんなシンプルなおもいがありました。



国連南スーダン共和国ミッション (UNMISS) 東エクアトリア州調整官・事務所長
平原弘子さん

ひらはら・ひろこ●在日米軍、国連環境計画、ユニセフで環境や水、衛生関連を担当し、リベリアのPKOに参加。ダルフル、キプロスに続き、2012年12月より南スーダンに赴任。

〈写真右下〉平原さんが担当する東エクアトリア州に駐留するPKOルワンダ部隊と、国連メダル授与式で。南スーダンのPKOには5人の日本人女性が行方不明中。



国連テロ対策委員会事務局 (CTED) 上級法務官
高須司江さん

たかす・すえ●早稲田大学卒業後、検察官検事に。国連極東アジア犯罪防止研修所などを経て、国連テロ対策委員会事務局へ法務省より出向。'10年3月、検事を退官し、現職に。

〈写真左上〉去る10月にルーマニアでCTEDが主催した会議でのシーン。国連と他の国際機関の専門家たちと共に各国を訪問し、これまでに100カ国以上の査察を完了しています。

国連テロ対策委員会は、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロを受け、安全保障理事会のもとに設置されました。その執行を支える事務局 (CTED) は、元検事という法律家の高須司江さんほか、専門家から成るグループです。

「加盟国のテロ対策をモニターし、質を高めるのが任務ですが、政策立案、法整備、刑事司法制度、対テロ資金管理、国境管理、航空保安、海上警備、武器統制、人権保護など広範囲を扱いますから、インターポール (国際刑事警察機構) など他の国際機関とチームを組んで、各国を訪問しています。私の主な担当はテロ法制、刑事司法制度、テロ資金対策、国境管理、法律の世界での国際協力です」

ISIL (イスラム国) やボコ・ハラムなどのテロ組織への懸念が国際社会に広まっていますが、CTEDはその世界のニーズに対応した存在なのです。

「テロは、病気でいえばひとつの症状だと思えます。元

を正さないとテロはなくなりません。テロの原因は複雑ですが、根本にあるのは貧困です。もうひとつは政治腐敗。民主主義社会で選挙に訴えても、腐敗していれば投票で社会は改善できません。そこで絶望的になり、暴力で世の中を変えるという思想が出てくるわけです。また、

法律家の視点から世界のテロ対策を向上

困窮から資金力をもったテロ組織の戦闘員になることもある。根源の問題を解決する地道な努力を、続けるしかないと思いますね」

もつかCTEDが懸念するのは、ロヒンギャという少数民族です。ムスリムの彼らは、居住地ミャンマーからも隣国のバングラデシュからも国籍を認められず、隔離された生活を強いられています。「テロリストの予備軍になりかねない過酷な境遇です。これまで日本は経済面で大きな貢献をしてきましたが、こうした難民問題への対策も含め、どう国の形をつくっていくか、真剣に考える時期に来ているんだと思いますね」

高校時代はピアノに打ち込み、人の心の機微に触れられるからと検事を選び、今は国連職員に。異色のキャリアです。

「国連内で日本の法曹は私だけのようなんです。もう少し仲間がいてもいいかと (笑)。この10年、インターンにも日本人は来ていません。少し内向きになっっている気がしますね。でも、欧米とは違う視点ももっているわけですから、国連に限らず、例えばソーシャルメディアなどでも日本の人たちがもつと国際的に意見表明できればと。それも世界へのひとつの貢献かもしれないですね」

「ひとりでも多くの人が平和な環境で暮らせること」。それが将来の夢という質問への、高須さんのお答えでした。

TOPICS

【国連広報センター所長】

根本かおるさんに聞く、国連トピックス



国連広報センター (UNIC) 所長
根本かおるさん

ねもと・かおる●テレビ局アナウンサー・報道記者を経て、1996年国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) へ。国連世界食糧計画 (WFP)、国連UNHCR協会でも要職を務める。

70周年を迎えた今、気候変動やテロ組織など、容易に国境を越える課題が増し、国際社会が一緒に合意をつくり、守るという体制が必要になっています。その一方、あらゆる国際会議を見ていると、国家や政府主体のものから、民間セクターや市民社会、また若者の代表など、「国」では括れない人たちが担う役割が大きくなっています。日本には高い技術力や品質力があり、素晴らしい実績のある企業や個人の方々がいるわけですか

ら、そうした場にもっと出て、世界に向かって提案してほしいですね。国際社会とのつながりや、自分も当事者であることが感じられると思います。

2016年は日本加盟60周年。UNICとしても、世界が抱える問題に対して、ひとりひとりにアクションを取ってもらうこと、敏感に受け止めてもらうこと、小さいうちから関心をもってもらうことという3つの目標を掲げ、皆さんに情報を発信していきたいと思っています。



©WFP/Rein Skullerud

世界が身近になる国連レクチャー

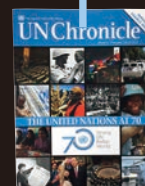
創設70周年記念セミナー「いま、日本から国連を考える」が開催中。2016年1月22日 (金) には国連WFP日本大使の知花くららさんが明治大学駿河台キャンパスに登壇。明治大学教学企画事務局 tel.03-3296-4403



©UN Photo/Cia Pak

国連と日本人職員のトリビア

国連機関で働く専門職以上の日本人職員は約800人。6割が女性で、幹部での男女比はほぼ五分五分といわれ、日本女性のジェンダー平等が国連ではすでに実現していることに。国連全体では、幹部職の女性の割合は約3割。



世界の今がわかる UNIC 情報

国連が発信する情報もぜひチェックを。例えばUNICがYouTubeで配信中の「WE THE PEOPLE - グローバル・ゴールズ」は、「持続可能な開発目標 (SDGs)」を世界のセレクトが訴える、見応えのある動画です。

国連ピース・メッセンジャーの活動はどのようなものなのでしょうか

「実際にどんなことをしているの？」と思う方も多いかもしれませんね（笑）。私たちは国連事務総長に任命され、各々の分野で国連の活動や平和の問題などをアピールしていくことが求められています。公式行事に出席したり、メディアで話したり、ソーシャルネットワークを使って国連のキャンペーンを拡散したり。難民キャンプを訪問することもあります。私のほかにも音楽家は何人もこの任に選ばれているのは、音楽家がボーダレスに活躍できる職業で、音楽が国籍や人種を問わず共有されるものと考えられているからではないかと思えます。音楽にはコミュニケーションを広げ、理解し合うきっかけとなる力があると信じています。「音楽が世界平和をもたらす」とはよくいわれますが、「音楽」が世の中を「平和」にするのではなく、「音楽」が人間のなかに存在する感情に働きかけ、世の中の見方を変えるのではないのでしょうか。

ご自身の財団やNPOでも音楽による社会貢献をされていますね

日本のNPO「ミュージック・シェアリング」では、アジアの子どもたちに本物の音楽を届ける活動をしています。クラシック音楽を聴くことも西洋楽器を見ることがほとんどなかった開発途上国の子どもたちは、純粋に私たちが演奏する音楽を聴き、新しい世界を知り、知識や経験を深めます。そうして好奇心や向上心が育まれ、音楽以外のことに興味を

もつ契機になる。活動を通じて、音楽家を含め、関わるすべての人が多くを学ぶことができるのも音楽の力だと思えます。

私自身も現地の方々と交流すると、当たり前前に思っていたことが身勝手な考えだったと自覚することも多く、勉強になります。ピース・メッセンジャーという肩書のおかげで、いろいろな体験を通じて学ぶ機会も多くなりました。すべての経験が「音」に表れるとすると、経験が豊かになることは、音楽家としてもプラスになっているのではないかなと思います。25年近く社会貢献活動が続けていますが、その経験を生かし、将来を担う子どもたちにコミュニティの一員であるという意識が芽生えるよう、全力を注ぎたいと思っています。すべての問題の根底に通じる相互理解実現の第一歩として。

国連の活動、役割について、どのような感想をおもちでしょうか

就任して8年の間にも、国連の役割は重要度を増し、活動の内容もより広範囲に複雑化しているように思います。「国際平和」とひと口でいっても、平和や安全保障観は時代と共に、また人々が生活している場所によって変容します。平和が政治、経済、文化（芸術、学問）、宗教、社会、自然現象などと密接に結びついていくことは、歴史が証明するところです。情報技術が発達した現代社会ではグローバル化が進み、あらゆるものの相互作用、連鎖反応は想定を上回るスピードで加速しています。より迅速に、多様な問題に取り組まなければならない。しか

【国連ピース・メッセンジャー】

五嶋みどりさん“平和へのメッセージ” ひとりひとりの可能性を信じて

ヨーヨー・マやレオナルド・ディカプリオらと並んで「国連ピース・メッセンジャー」を務める国際的ヴァイオリニストの

五嶋みどりさんに、国連の活動を通して感じたこと、平和、音楽の力などについて伺いました。

しながら、幸運にも平和な国で安定した生活を送っている人にとっては、それらの問題は対岸の火事のごとく、国連の重要性は認識しつつも、身近には感じられていません。この現状こそが、現在の国連の大きな問題ではないでしょうか。

生命の危険と隣り合わせの問題を取り扱っているイメージが強いせいか、日本では国連の存在感が薄いように思います。けれど、国連が唱える「平和」には、教育問題、貧困、ジェンダー平等、ドメスティック・バイオレンス、子どもの虐待など、日本のような成熟した社会でも周囲の人が抱えているかもしれない身近な問題が含まれています。そのことが充分に知られていないように感じます。いくら国連が声高に問題を提起しても、国連だけですべてを解決できるわけではありません。個人の意識を高めていくことが大切だと、国連自体も考えています。私も国連の活動をエンパワーメントできるように、努力を続けたいと思っています。

国連の目的でもある平和のために私たちにできることはなんでしょう

「平和のため」というと大きな話のように、「何もできない」と無力さを感じてしまうかもしれません。平和の観念は人によって違って当然なのですが、私は「平和」は「acceptance(受け止めること)」だと思っています。自分自身に素直になり、自分を「accept(受け止める)」する。そうすることで他者への思いやりも生まれ、心が豊かになり、初めてもつと大きな意味での「平和」を考えられるのではないかと思います。

国連では、国連行事などに直接参加しなくても、平和をプロモートするそのフィロソフィーに共感して行動を起こせば、国連の活動に参加したのと同じだと広義に解釈しています。今、私は国連ピース・デーのキャンペーンとしてウェブサイトで呼びかけていますが、そのメッセージを聞き、平和について考えたり、ボランティア活動に参加したりすれば、その行為は平和につながり、国連の活動に参加していることと同じなのです。

自分が生きている社会の一員であることをまず意識して、コミュニティに何を貢献できるかを考え、行動する。簡単なことではありませんが、自分自身の可能性を信じて、頑張っていたきたいです。

五嶋みどり

ごとう・みどり●ヴァイオリニスト。「Midori & Friends（みどり教育財団）」「ミュージック・シェアリング」などで音楽による社会貢献活動も。南カリフォルニア大学ソントン音楽学校弦楽学部教授ほか。2007年9月、国連ピース・メッセンジャーに。

五嶋さんが理事長を務めるNPO「ミュージック・シェアリング」

国内外で子どもたちに本物の音楽に触れる機会を提供し、人間性を育む環境づくりを応援する「ミュージック・シェアリング」。障がいのある子どもたちへの楽器指導支援プログラムも。「東京オリンピック、パラリンピックが開催される2020年を目標に、このプログラムを全国に広げ、参加した子どもたちでオーケストラをつくり、演奏会をしたい。私の夢のひとつです」●CD「J.S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」好評発売中。



©Timothy Greenfield-Sanders